月の魚

立木鷹志

店の名前は忘れたが、先日、日比谷の東宝ツインタワービルにあるエスパースジローの上の喫茶店で、ある女性とお茶を飲んでいた私は、「ここは異次元の世界のようね」と言われて、改めて自分の精神的偏向に気づかされたのだった。

エスパースジローという店は、B_3からB_2まで吹き抜けになった天井に、小さな電球が満天の星の如く下がっていて、私達のいるB_2の回廊状の喫茶店の硝子を通して見下ろすと、宇宙の涯てから〝星の絨緞〟を見るような印象を覚え、私は好ましく思っていたのだが、相手の女性の表情には、その店が好きとか嫌いとか言うより、寧ろ、宇宙の涯てに一人ぽっちで捨てられた自分をどうしてよいかわからぬといった不安のようなものが現われていた。更に言ってみれば、その表情には、そうした状況を精神の抽斗の何処に仕舞い込めばよいのかと戸惑う自身を懸命に怺えているような気配すら窺われて、私は、自分が好きなものは他人も好きな筈だという愚かな思い込みに軽くしっぺ返しをされた格好で、その場を取り繕うために異常な饒舌に陥る醜態を演じたのだった。その店を好む女性客は意外と多いので、その反応はその女性特有のものだったかも知れないが、或る点で、彼女は正確に私の偏向を言い当てていたとも言えるのである。

つまり、私の精神には、どこかにこの世界を全的に把握したいという欲求があり、そのためには、常に自分を世界の外に置いておきたいという根強い願望があるのである。それは、子供の頃の、遊びにかまけて日が暮れて、不安を抱いて家路についた途中で民家の団欒の燈火を見たときに覚えた安堵と羨望の入り混った甘い思い出や、隠れん坊をしていて、あまりにも完璧に隠れてしまったために一人取り残されてしまったことがわかったときの孤独と不安の混淆した奇妙な充実感に由来しているものかもしれないし、或いは、病弱だった十一、二歳の頃、毎朝家の脇の道を登校する友人達の声を聞きながら床に臥していたために、私の中に根強く居座ってしまった孤独への愛着のせいかもしれないの

であるが、その一種隔絶された感覚が、宇宙の涯てからこの世界を見たいという欲求や現実の裏側から全てを見てみたいという偏執になっているのであろう。

肉体は悲し、ああ、われは全ての書を読みぬ。
逝れむ、彼処に逝れむ。……
（岩波文庫『マラルメ詩集』鈴木信太郎訳）

この詩句のごとき度し難いまでの私の性癖は、いかんとする術もなく、日常にも時々顔を覗かせるのである。

＊

昨年の十月の日曜日、町内の慰安会でハゼ釣りに行ったときのことである。私達は、町を流れる中川を釣舟で下って、東京湾内へ這入った。季節がら、途中何叟もの釣舟や小型の遊覧船やモーターボートが出ていて、釣り始めたのは十時を廻った頃である。釣った魚を天ぷらに揚げて昼食にと準備して行ったものの、一向に釣れず、それを見越して持って行った魚を揚げて食事を済ませた。十人以上で、釣った魚は七匹。元来、釣りよりも舟上での酒宴が目的の会であるから、釣れても釣れなくともおおらかなものである。

ところで、その日私は、川を下って行く舟の吃水線から見た川幅の広さに驚かされたのだった。水面を滑るほどの位置に視点を置くと、普段百米くらいの幅の川が、たちまち、まるでアマゾン河のように満々と水を湛えた大河に変ってしまうのである。水泳を覚えて間もない頃、この川を泳いで渡ろうとしたときの川幅がふいに私の脳裡に浮んだのだった。都内に這入って、川岸にコンクリートの堤防が現われたときの偉容にも驚かされた。岩壁のようで、その下で釣りをしている人々の姿が巨大な

岩山を背にしてキャンプを張っている登山者のようにも思われてくるのだった。いくつかの川が合流する河口に来ると、海水の逆流を防ぐ巨大な鉄の水門がまるで真紅の城塞のように見える。そして、次々に潜り抜けて来た架橋は、裏側から見上げると、まるで内臓を開かれた動物のように、ガス管や水道管や種々のケーブルが走っていて、日頃の川を渡るためのものとは無縁の容貌を現わしている。それは、いつも川沿いを歩き、幾度となく走っているときには思いもつかない容貌であった。

左手の青空にやや霞むようにして西洋の城館をかたどった建物が見えたとき、誰かがもう酔いの廻った声で、「あれがディズニーランドだって」と言った。すると、ひと頻り、その話題に花が咲いた。「来年の四月オープンだって。子供を連れて、行って見ようと思うんだ。何しろ広いんだって。後楽園の十五倍もあるんだって」「あの辺りは何処だろう」「浦安。浦安の埋立地に出来たんだよ」

ディズニーの城が大きく、明瞭に見え始めて来たとき、舟は砂洲の間を抜けるように大きく右へ廻って、進路をとった。皆、名残り惜しげに後を振り返っているが、私はそれよりも、日頃の川とは異った顔を見せる川の変貌に気を取られていた。

すると、その時、ふいに大きな声が揚った。

「駄目だ！　駄目だ！　船頭さん、そっちは違うよ！」

モーターボートに乗るのが道楽で、皆から〝キャピテン〟と呼ばれているNさんだ。舟が狼狽てて進路を変更したその辺りの水面には、先端に白い布切れが結んである細い竹の棒が何本も見える。

「この辺りはすぐ様子が変っちまうんだ。俺もこの間やっちまったのさ」

Nさんが言った。どうやら、舟は浅瀬に乗り上げるところだったらしい。昔から川と馴染んで来た町なので、川に詳しい人は沢山いるのだが、船頭ですら間違うほど様子が変ることもあるようだ。

帰路についたのは日が落ち始めてからであった。上げ潮時の川面は、河口から上流に向って波打ち、水銀の表面のように丸く持ち上がって、鈍く光っている。他の船も戻り始め、一緒に並んでいる船同士声を懸ける。

「どうでしたか、獲物は？」
「今日は駄目だね」
〝誰そ彼時〟という言葉どおり、薄暮に包まれて、相手の表情は見えず、声だけが闇の中から届いて来る。川岸を走る自動車の列もヘッドライトを点し始めた。
架橋を潜ると、それは大きなドームのように頭上を蔽い、舟のエンジン音が異様に大きく響き渡る。
その名前はわからないが、上げ潮で膨れ上がった水面と橋との間が極端に狭くなっている架橋があった。その手前に、まるで弧を描く鷹のように、同じ場所をゆっくりと旋回している船の影がある。近づいて行くと、朝一緒に並んで下って来た小型遊覧船だった。
「連中、大きすぎて通れないんだ」
Nさんが揶揄するように言った。
「頭を伏せて！　首を出すと危いよ！」
怒ったような船頭の声で、全員が舟底に身を潜めて小さくなる。私は、大分酔っていたので、他に〝睡〟ている者と一緒に仰向けに寝転んだ。
暮れなずむ空に細い月が浮んで、金星がいくつかの星を連れて輝き始めていた。と、ふいに視界が暗闇に蔽われ、私は奈落に沈んで行くような感覚に囚われた。エンジン音だけが、酔った私の心音のように響き渡っている。それは極度の貧血状態に似て、外界を見詰めようとする意識だけが働いているものの、何ひとつ見えない奇妙な時間だった。その眩暈にも似た暗闇の中にいたのは、ほんの数瞬間だったろう。やがて、ふいにその暗闇の中空に、一本の針のように光るものが現われたのだった。
舟底に仰臥する私の頭上から現われ、静止したままのその物体をじっと凝視していると、それは、架橋のコンクリートの継ぎ目が崩れ、その間から向う側の光が射し込んでいるのだった。私は、舟の動きとともに近づいて来るその光から眼を離さず、ずうっと見詰めていた。その細い光が舟底に仰臥する私の恰度正面に来たとき、暗闇の裂目のようなその隙間から真直ぐに夜空が見上げられ、その中

に、柳の葉のように細い月が銀色に輝いて見えたのだった。それは、月というより、水中でえびらを翻した魚のように思われた。譬えるなら、向う側にあるもうひとつの世界を、太宰治の『魚服記』の少女の変身した魚が泳いでいるかのように見えたのだった。そして、その世界を遊泳する銀色の魚をもし釣り上げたなら、この舟上で再び少女に変身するかもしれないような、或いは、私自身がその魚と共感し得るかもしれないような気がして、私は、その時初めて、すぐ横にある釣竿を取り上げ、釣糸を暗闇の隙間に垂らしたい強い衝動に駆られたのだった。

しかし、その時間は一秒の何分の一という短い間のことで、次の瞬間、再びすっぽりと暗闇が視界を蔽い、更に何秒か後に、舟は橋を潜り終えていたのだった。

すっかり暗くなった夕闇の中で、少し離れた岸辺には自動車のライトが長く長く連なってのろのろと動いており、夜空には何の変哲もない月が浮んでいた。その日常の光景が視界に戻ると、数瞬前の出来事は、あの架橋の下の暗闇の中で見た夢であるかのように思われ、自分が釣竿を手にしようとしたことが不思議なことに感じられて来るのだった。